たかさご史話 67

～赤鉢巻き事件と河合義一（四）～

○河合義一の思想と行動

（その二）

なぜ、河合義一は加古川町の埋め立て工事に対抗して、二百数十名の農民を動員して、麦まきを実行したのでしょうか。

河合は埋め立て工事の現場を見た後、すぐに町長に面会を求め、「小作人が買収について地主から何等の通知を受けておらず、埋め立てされてしまった後に小作権に対する賠償は出来ないので、賠償問題が解決するまで埋め立て工事を中止して貰いたい」と町長に要請しました。

町長との会談後、河合は「町長に誠意がないから明日は麦薪じゃ、又一度山を上げなければならぬ」と言って、実際、翌日の早朝から麦まきが実施されました。この決断は非常にはやく、何が河合をしてこのような決断をさせたのでしょうか。

埋立の現場に河合を案内した小作人Tは、河合に「こないになるまで放っておくことがあるかと言われ」たと証言しています。工事着工からすでに一ヶ月以上が経っており、このまま放置しておけばそれが既成事実と化し、小作権の主張が出来なくなる、従って一日でも早く工事を中止させ、その間に小作権を主張して、少なくともその代償として代替地や補償金を獲得するのが河合の考えであったと思われます。それゆえ、一刻の猶予もなく現場から町長のもとへと直談判に及んだのでした。

以上の経緯から、河合の二つの面を指摘したいと思います。一は河合の現場主義。農民運動家として、常に現場に行って自分の目で見て、指揮を取るのが河合のやり方でした。二は、こうと決めたら即実行に移すというある種の「果断さ」や「激しさ」です。

こうした河合の「激しさ」はどこから来るのでしょうか。河合家には、幕末の新撰組勘定方を勤めたが冤罪によって斬首された伯父、耆三郎のような「熱血の気質」が流れているのかもしれません(『河合義一伝』)。赤松啓介氏も、戦前、河合の盟友行政長蔵から、そうした河合の「激しさ」を聞いたと言います。同時に氏は「私の接触を通じての印象では、河合義一は極めて楽天的で、誠実な人柄であり、組合活動でも親切であったから組合員のみでなく、一般の農民から非常に信頼されていた。」と書いています(同書)。

こうした誠実の人、河合にとって加古川町長の対応が「誠意がない」と感じられたのはけだし当然かも知れません。

（市史編さん特別執筆者　小南浩一）